日本画制作における「自然界・自然環境・宇宙」の表現の考察
― 自作の原点を探る試みⅢ ―

藤　崎　いづみ

キーワード：宇宙、宇宙の花、自然の宇宙的表現

1. はじめに

筆者は自らの専門領域である日本画制作において「自然界・自然環境・自然現象」を主なる画題とし制作してきた。そして本稿は、筆者にとって新しいテーマである「宇宙」をモチーフとした制作の経緯について述べるとともに、これまでの自身の作品・作風を「宇宙」という観点から振り返り、自作品のテーマと技法を「自然の宇宙的表現」として探求・考察しようとするものである。筆者の言う「自然の宇宙的表現」とは、自然を最も巨大な自然物「宇宙」に包まれた「地球の自然」「日本の自然」としてとらえることである。

さらに筆者がこだわってきた「桜」の表現も、この「宇宙」という独自の視点で考え記述することを試みたい。

はじめに、新しいテーマ「宇宙」の制作における基点につ

桜美林大学× JAXA「宇宙フェスタさがみはら 2016」で学生絵画作品と合わせ映像化
藤崎いづみ作品①『花Ⅰ』紙本彩色 91.0cm × 60.6cm
「第 32 回雪舟国際美術協会展」国立新美術館出品　特選受賞作品

いて述べる。

筆者にとり新しいチャレンジである日本画制作における「宇宙表現」は、2016 年の桜美林大学× JAXA 宇宙フェスタさがみはら 2016」での教育研究と表現がきっかけとなった。ここで筆者は、日本画制作における独自の表現として、「宇宙の花」を主題の中心に据えた。つまり教育実践から「宇宙の花を描くこと」に導かれたのである。この「宇宙の花」の連作の考察と、主題となる「宇宙から見た地球の自然界・自然現象はこうなった」という表現についても分析したい。

自然が自然として連綿と続くことは、強く美しい宇宙の様子が現れたものであり、筆者のこれまでの創作を振り返ると、無意識のうちにそれを「自然の宇宙的表現」として描きとめることをめざしていることに気がついた。本稿では、そうした観点からこれまでの自作を振り返る。さらに、「自然の宇宙的表現」の一環として、古典和歌集に編まれた日本の美意識を捉え自身の作風に展開する試みについて触れる。又、意匠の感性を大切にしタイポグラフィーである書に発展した表現の試み等々を綴りたい。

2. 宇宙の花

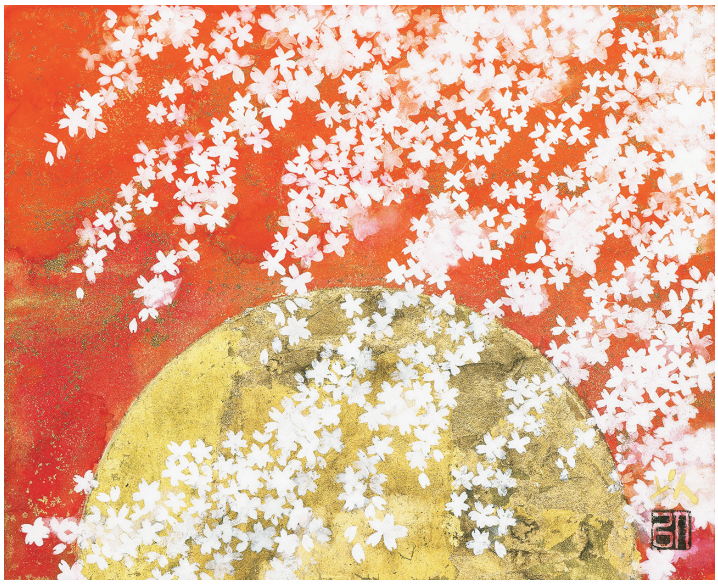
2－1　表現研究と教育

筆者は表現研究においては、教育実践を通して表現者としての感性を呼び覚ますことも面白いと考えている。教育体験から得た表現研究とは、主題を分析・考察・論説し、自身の日本画制作と研究に結びつけることから、思いがけない発展があるのである。

桜美林大学× JAXA「宇宙フェスタさがみはら 2016」で学生絵画作品と合わせ映像化
藤崎いづみ作品②『花Ⅱ』紙本彩色 22.0cm × 27.3cm

右の作品は、冒頭で紹介した藤崎いづみ作品①『花Ⅰ』の連作である。これら作品の実践報告は以下である。

2016 年 11 月に桜美林大学と JAXA のコラボレーション企画として「宇宙における生命の可能性を探る」をテーマとした「宇宙フェスタさがみはら 2016」を相模原市立博物館にて開催した。これは、筆者所属の教育組織である芸術文化学群造形デザイン専修有志



桜美林大学× JAXA「宇宙フェスタさがみはら 2016」で学生絵画作品と合わせ映像化
藤崎いづみ作品③『花Ⅲ』紙本彩色 22.0cm × 27.3cm

学生と音楽専修学生による、映像と音楽のコラボレーション企画であり、筆者は、アクティブラーニング[1]の試みとして指導にあたった。具体的には、音楽専修学生による音楽専修教員作曲楽曲の生演奏に合わせ、博物館プラネタリウムに投影する映像を制作した。その内容は、宇宙や月をテーマに造形デザイン専修有志学生と卒業生が手描き絵画を制作し、さらに筆者が日本画作品を制作、そしてそれらの作品をメディアデザイナーである卒業生が Mac の imovie でメディアアート化した。藤崎いづみ作品②『花Ⅱ』と③『花Ⅲ』共に、その目的での制作である。藤崎いづみ作品②『花Ⅱ』が夜（宵）の表現に対し③『花Ⅲ』は昼（陽）の表現である。この時間の流れを背景の色で表象するデザインは、先の論文「日本画制作における『桜』の表現の考察」での執筆が基点となったのである。今回、それを宇宙の花の表現に転じた。（藤崎 2013：133）現代にふさわしいビジュアルアートとしての独創的な教育にチャレンジし、筆者の日本画作品を次世代のアーティスト作品と共に投影した。

2－2　日本の宇宙を表現する

日本画材の岩絵の具は粒子状であり、膠を溶き合わせることにより細やかな印象を和紙に描くことが出来、筆者はその技法と岩絵の具の魅力に惹かれてやまない。加えて、日本の美意識は緻密、繊細、丁寧である。ゆえに日本画は、滲み、ぼかし、かすれ、等々の筆さばきと技法、画面の仕立て方により優美な日本の美点を捉えられる。又、琳派の手法表現としての「たらし込み」[2]技法は、宇宙空間を表現するのに絶妙な効果をもたらすことができる。そして、宇宙の美を追求するのには、岩絵の具の粒子で「宇宙の粒子」の美を表現することがふさわしいであろう。冒頭の藤崎いづみ作品①『花Ⅰ』のコンセプトを次に記す。

『花Ⅰ』
宇宙の花は月である。
そして、宇宙の景色は
岩絵の具が滲むように、ガスや粒子が、天空に滲む。
桜のむこうに宇宙が視える

以上が『花Ⅰ』の技法と表現についての考察であるが、筆者が描きたいことは「花は地上に生息しているだけではない」という心入れである。ここで「宇宙を岩絵の具で描く」技法事例を次に記す。

① 雲母で画面を薄く引き、具墨で線描写し彗星を瞬かせる
② 天然岩群青に胡粉を滲ませ、暗黒星雲のガスを画面に仕立てる
③ 白番岩絵の具の微小な粒子で散開星団を渇筆描きし、墨の濃淡で天空を引き染する
④ 群青色に金銀の砂子を蒔き、星雲を描き広げる
⑤ 焼群青に金泥を滲ませ、朧月と金星を輝かせる
⑥ 箔をあかし太陽光を輝かせ、黒緑青で空と宙を平塗りする

筆者は、この草案を基点として岩絵の具の魅力と特性、技法・筆遣い、そこから成り立つ前述の宇宙景観の作風について、そして新しい日本画世界観を考えてみたい。そういった解釈を綴ることによりオリジナリティーを確信できるのである。ゆえに、このテーマについて次の項目でも、宇宙の色と空間、質感を感じる岩絵の具の材質について述べたい。

3. これまでの自作品における花の宇宙的表現

3－1　宇宙の色について

宇宙の色と画面に適している岩絵の具は、ラピスラズリである。この顔料は、まさに天球を瑠璃色に導く静かな色で、宇宙のエネルギーが凝縮したような天然石が原料である。この半貴石を岩絵の具として精製すると群青色となるのである。日本画壇の重鎮・日本画五山[3]である平山郁夫[4]が、20年の歳月をかけ制作した奈良薬師寺の玄奘三蔵院の『大唐西域壁画』[5]と、シルクロードの夜空を描いた天井画は、ラピスラズリで彩色された歴史的名画である。豊潤なラピスラズリで彩色され星が瞬き、天井の右に太陽、中央に散華、左に月が美しく描かれている。大唐西域壁画は玄奘三蔵の仏教の聖地に到達する旅をたどる大壁画で、画面は1日の時間の流れを表現する13画面で成り立っている。時間の流れを作品に展開した筆者作品については、本稿の2-1で事例として記した。

また、西洋画ではオランダのバロック絵画の代表画家ヨハネス・フェルメールが挙げられる。フェルメールの色使いの魅力は「フェルメール・ブルー」と呼ばれるウルトラマリンブルーであるが、その原料もまたラピスラズリである。歴史的名作『真珠の耳飾りの少女』の少女のターバンの群青色であるラピスラズリは17世紀には金と同等に高価で「天空の破片」とも呼ばれたそうである。別名ラピスラズリは、仏教では瑠璃と呼ばれ、古代

エジプトでは壁画に使われ、贅沢な装飾品でもあった。こうした魅力を放っているがゆえに、ラピスラズリは紺青の青色の天空の輝きを描くことができるのである。

ここで、その深い美しい青を際立つように意図して制作した筆者作品を紹介する。藤崎いづみ作品④は、紺青に滲むような金色の光をイメージして描いた。モチーフの向日葵は太陽に向かい精一杯生きている。その生なる姿を描くため、空間は夏の強い蒼い空か、紺青の夜空か、どちらにも鑑賞者の心に刻むように様式デザイン化した。今思えば、筆者はこの作品において無意識に「自然の宇宙的表現」を描いていたのである。画面の太陽に向かう向日葵は、実は向日葵が太陽を表現している。太陽という「宇宙の花」が、紺青のラピスラズリによって表現された「宇宙」空間の中で燃え咲いているのである。表現技法としての筆さばきは、雲肌麻紙に無意識に気合いをこめた仕上がりである。筆者はこの作品を描いていたときに、無意識のうちに「太陽も花である」と見据えていたのである。

藤崎いづみ作品④『向日葵』紙本彩色 17.9cm × 13.9cm

3－2　生命の多様な美を描くこと

日本人は自然と共生し、生きてきた。日本画の技法は自然界・自然環境を表現出来、その世界観を豊かに伝えられる。この日本画の精神を、歴史日本画の大家、能書家の安田靫彦[6]は「自然に学ぶことと、古典芸術に学ぶこと」という制作理念として伝えている。日本画の巨匠は、日本が古来より守り続けた自然を見つめ描き続け、書き綴った。想うに、日本の自然環境を脈々と伝承した視覚芸術は日本画である。その自然界・自然環境の表現は、日本画の岩絵の具の筆遣いが適している。自然現象は岩の絵具を溶くように、滲むように緻密・繊細・丁寧に変化するからであろう。筆者がたどりつきたい「自然の宇宙的表現」とは、自然と伝統に学ぶという安田靫彦の理念を、自身の感性で宇宙的視点から表現することかもしれない。宇宙は、大自然の現象を創造している。地球上の自然は宇宙が創り、花は宇宙の美を象徴しているようである。そのような自作品の例として、藤崎いづみ作品⑤『Exotic Ⅱ』を紹介する。筆者のこの作品制作への当時の想いの展開としては、日本画は和紙の空間を活かすこと、面と線の写実表現であり空間表現は非常にデザイン性があること、その空間と和紙の良さを活かそうとしていた。この作品はフランスのマドレーヌ寺院「サン・ロワイヤル」での国際展で発表した。マドレーヌ寺院はフランス政府の国葬が行われる格式高いカトリック教会で、「サン・ロワイヤル」は礼拝堂の下の展示スペースである。又、この作品はフランス芸術家協会代表のアラン・バザール氏が賞賛し、評論文を執筆していただいたエピソードがある。筆者は、この作品は国際展を意識して和紙の深みと品位に寄り添う彩色描写を心がけた。それは、清澄な風情を筆に込めたのである。

藤崎いづみ作品⑤「Exotic Ⅱ」紙本彩色 53.0cm × 33.3cm

しかし、筆者の友人の美術愛好家は、この作品をみて「まるで高エネルギーが華々しく反応した星の誕生を彷彿させる」と評した。友人は、この作品から「宇宙の花」をイメージした様であった。様々な展開がある不思議な作品である。

筆者が思うに「花が美しく咲く」という自然現象は、宇宙と地球のリズムがその生命の神秘を築いている。そして、その地球のデザインを描きとめたのが琳派である。琳派について、筆者は先の論文「日本画制作における『桜』の表現の考察」で以下のように述べた。「(中略) 季節を飛び越えて咲く花々は、現実の自然の摂理では存在しない風景である。しかし、真の自然界のバランスとリアリティが調和している一作であると考察する。」(藤崎 2013：130) これは、酒井抱一の『四季花木図屏風』四曲一隻についての考察である。一隻の屏風画面に四季の花々を調和させ、自然界のバランスとリアリティを仕立てた世界観である。その世界観は、様々な自然物の生命・水・大気を実感する日本の美感である。その琳派的なデザインをオリジナル展開すること、筆者が実感した地球のリズムとエネルギーを和紙にこめたいのである。藤崎いづみ作品⑥『四季の彩り』は、宇宙から見た自然界、自然現象を彷彿させる筆者作品である。これは、季節を飛び越えた花々の多様な生命美を、琳派のデザインをオリジナル展開し描いた作品である。ここには宇宙から視た、真の自然界の融合を無意識に描いた筆者の宇宙観が現れている。

藤崎いづみ作品⑥『四季の彩り』紙本彩色 90cm × 220cm 赤坂 DS ビル特別会議室所蔵

そして自然の生命は美と深く在る、とも思う。その歴史的考察をとりあげる。

江戸時代に本草図説という、博物画の和綴本が刊行された。これは本草学といって自然科学の分野研究のための原色百科事典である。すべて手描きであり、動物から植物まで、江戸の絵師が自然に敬意を払って丁寧に写生したのであった。日本古来の自然への想いが、歴史や時を越え受け継がれたのである。このようにテクノロジーやソーシャルメディアが存在しない時代も、日本美術の巨匠達は自然と向き合い研究し、手を使い描写してきたのである。その本草図説は、江戸時代のトレンドであり時代的に隆盛した。ここでふたたび、

日本画の巨匠安田靫彦の制作理念を引用する。「理想を描く歴史画であっても、作品の造形という面においては他と同じ現代性をもつことを、絵筆をもって示した。」と巨匠は述べている。

いつの時代も美は隆盛し、その隆盛した美意識がトレンドであった。そしていつの時代も隆盛を創るのは、宇宙のシステムで、それをアーティストは描きとめたのだろう。宇宙には美しい物体や事象、カタチやコトを生産する法則があり、宇宙はどこの角度から見据えても美しい形態で、どこの角度から見据えても必然な事象を生産する法則がある。そして、美術、美意識のみではなく宇宙の巡り合わせには必ず理由があるのである。自然界、自然現象を主なる画題として制作し発表している筆者は、この先もずっと地球上の生命の弱さと強さの魅力を忘れずにいたい。

4. 制作においての文学作品からのイマジネーション

筆者は、宇宙を描くにあたり古典の詩や和歌に編まれた天文世界を詠みとろうとし、その歌の音感、文字感を観て愉しんだ。そこから情緒を高め宇宙観を筆にしたいと考えたのである。

そこで、古典和歌集の冥き宇宙を歌った世界観から月の美観を詠んだ和歌を事例として記する。これについては、天文学者の海部宣男著『宇宙をうたう』を引用する。

> 事例①天の原ふりさけ見れば白真弓張りて懸けたり夜路は吉けむ　間人宿禰大浦
> (『万葉集』巻三・二八九)
> (中略) 妻訪いの男が、これからの夜道を月が守ってくれるようにとの祈りをこめた歌であろう。半月過ぎの月にちがいない。弦をひいた弓にたとえた、白く鋭い月の印象が美しい。純白の月の弓が射放す光の矢は、夜道に潜む悪霊や害意を持つ土地の神々を追い払ってくれるだろう。(海部 1999：24-25)

この和歌においては、日本の独特な美意識を観賞することが出来る。筆者は先の論文「日本画制作における『自然・自然現象』の表現の考察」で以下に述べた。「日本の美意識は直接にモチーフを描くことではなく、印象を描くことが日本画の特徴であるとも考える。東京美術学校[7] 創設者岡倉天心[8] は東京美術学校の授業で「名月」というテーマでの課題で、月は描かない、月を視て、何を描くべきか、心を描くように暗示して、表現することの大切さを唱えたというエピソードがある。自然そのものを描くことではなく、自然を暗示させる提案であろう。」(藤崎 2015：123)

事例①の和歌では、月という詞を隠して月を詠む。月を暗示させる音感、文字感での歌はデザイン性があり、古典和歌には、情景を想わせるイメージ力によってメッセージをしみじみと味わうことのできる情報伝達力がある。

この文献から考察されるのは、古代の日本では日常が月の呪力と深くかかわってきたことである。古代の人々は、人間の力の及ばない自然への脅威を感じ、それへ祈ることを歌

に託したように想える。その月の神秘への心象は『万葉集』後期以降になると、かなり薄れたようである。その事例である。

事例②木の間より漏りくる月の影見れば心尽くしの秋は来にけり　よみ人しらず
(『古今和歌集』一八四)

事例③大空の月の光し清ければ影見し水ぞまづこほりける　よみ人しらず
(『古今和歌集』三一六)

どちらも、美しい月の光である。月を愛で眺める「観月」の習慣の日本への輸入と普及は、九世紀頃のことらしい。(中略) 平安時代以降は月の呪力は大幅に弱まってしまったらしい。(海部 1999：25-26)

藤崎いづみ作品⑦『宇宙の花』紙本彩色 91.0cm × 60.6cm

自然の脅威や神秘を感じる心が薄れてくるという傾向は、歌や時代の変遷とともに事例②③のような月を愛でる数々の歌が詠まれるようになったことに現れている。つまり、『古今和歌集』では、「月を愛で」月を美しいものとして歌に詠まれた。月が美の象徴として歌に詠まれたのである。

ところで、文体を心に刻み、新しい制作や技法にたどりつく筆者の制作方法として、漢詩調の詞から星空のイメージで宇宙を仕立てる楽しさもある。『万葉集』では星の歌は少ないが、その事例の一首は以下である。

事例④天の海に雲の波立ち月の船星の林に漕ぎ隠る見ゆ（巻七・一〇六八）

（中略）漢詩調の歯切れのよい言葉—天海、雲之波、月船、星之林、と並べて、明澄な夜空にうかぶ月と星のイメージを明るく絵画的に歌っている。

本書の著者・海部宣男氏は世界最大級望遠鏡「すばる」を建設した天文学者であるが、天海、雲之波、月船、星之林といった上記の詞はそうした彼の心にひびく歌の詩感である。本稿で後述するが、私はこれらの詞のイメージでの制作も試みている。

次に鎌倉時代の勅撰和歌集『玉葉集』から引用する。

むらむらに雲のわかるるたえまより暁しるき星いでにけり　従三位為子

夜明けにむら雲から差し込む明けの明星の金星の描写であり、「わかるるたえま」という響きの音感は、視覚的に極めて美しい。筆者は、『玉葉集』の文字を視覚的に詠み込み新しい宇宙観作品として金星を描いた。藤崎いづみ作品⑦『宇宙の花』である。画面には金星に添える花として薔薇を配した。それは、薔薇が宇宙の星の誕生がもたらすダイナミックな天空の光としての構成で、銀河系、惑星の軌道を円のエレメントで視覚デザインした。筆者が想うに、天文学的には、宇宙の実態は天体の活動であり銀河系で様々な星の誕生を繰り返すのだろう。筆者は、天空のガスによる物質の変化により実は美しく花を咲かせる、という視点で宇宙を感じたい。ゆえに、地球全体を眺め、宇宙全体も眺め「地上に生息するだけではない」その花を描きたい、と想う。

5. 墨による風景画における宇宙的表現

5－1　墨による諏訪湖の風景

墨の与える視覚情報は、宇宙の神秘を眼に焼きつけることができる。墨を磨りおろし水と膠を溶きあわせることから、実に綺麗な発墨によるエネルギーが生まれ、美しい黒い多様な宇宙の拡がりを創ることができるのである。墨と顔彩で諏訪湖の風景画を描いた。これは、筆者の友人が撮影した諏訪湖と富士山が同時に見える絶景風景をもとに、筆者が水墨画で描いたものである。その写真画像は宇宙的視点からみた風景観を捉えているように私には思われたのである。白く輝く諏訪湖の湖面は、星の集合体の光の強い放射のようで、山々は稜線が時空を超えていく現象の様子に思えた。

藤崎いづみ作品⑧『諏訪湖水墨画』は、その写真作品から墨絵における宇宙的表現を試

み、花冷えの諏訪湖風景画に仕立てた。筆者の思いは日本という国は桜が毎年、華やいで咲く自然環境であってほしいし、薄曇りの日本の初春に桜は柔らかな光源を放ち、優しいエネルギー帯を感じる、という想いである。

このようなメディアアートから手彩色作品への制作プロセスは、前項の 2-1「宇宙の花 –表現研究と教育–」で試みた企画とは逆のプロセスである。水墨画とメディアアートについては、筆者は先の論文「日本画制作における『桜』の表現の考察」で、映像の中の桜をメディアアートとして、筆者の描く水墨画のコラボレーション企画が実現したことを想いだす。（藤崎 2013：138）その際には、映像プロジェクトとしてアナログ表現からデジタル表現への制作進行であった。今回はその逆の制作進行で、映像プロデューサーの写真作品を筆者が水墨画表現にリ・デザインしたのである。

日本の真ん中に位置する諏訪湖の自然界・自然環境の清純無垢な桜はきっと花燃えるだろう。そんな想いで筆をとった。自然界・自然環境は様々な条件が揃い美しい地球の自然をつないできた。日本の自然は、地球につつまれ、銀河系につつまれ、宇宙につつまれることによって脈々と美しくあり続けることができたのだ。宇宙につつまれたから日本画の美しい世界観はあり続けた。その宇宙の恩恵をひたすら描ければと想う。

2016 年夏に、アニメーション映画「君の名は。」が公開されメガヒットした。この作品のキーワードは、舞台となる糸守町に落ちる彗星である。そして、それは作者新海誠の故郷の長野県の諏訪湖がモチーフという説がある。日本のアニメーションは現代のメディアアート芸術であり、日本画の造形美意識を受け継いでいると感じる。どちらも面と線の

藤崎いづみ作品⑧『諏訪湖水墨画』墨絵 24.3cm × 33.4cm

写実表現が特色である。筆者は、この映像を通して、自然と文明の脅威を忘れてはならない、と心に響いた。つまり、自然と文明（テクノロジー）は人が越えてはいけない領域がある。これは前項 4. 制作においての文学作品からのイマジネーションでふれたように、古代の人々が自然への脅威を古典和歌集に祈り歌ったことにつながる、筆者の独自の視点でもある。そして「君の名は。」のスクリーンから静かに伝わる地球上の生命の弱さと強さの魅力、古き良き日本の文化、これらを忘れずにいたい、と真に実感させる映像であった。宇宙からの使者である彗星は不気味な綺麗さであった。この映画をみて、いにしえの頃から続く日本の自然の恵みを描きとめたいと再認識した。

日本の真ん中の自然界、日本の真ん中での自然現象は、日本の自然の力を見せつける。諏訪湖にはそんな精緻な美の力があるのである。

さらに、自然が自然と続くことは、強く美しい宇宙の様子が現れたものであり、そんな日本の神秘が続くようにと切に願う。その様子と想いを描きとめたいのである。

次節では、こうした墨による風景の宇宙的表現をさらに発展させ、墨の力で宇宙を凝縮する表現について記す。

6. タイポグラフィー

書で宇宙を描いてみた。墨の濃淡による宇宙空間の広がりを、タイポグラフィーとしての様式美に仕立てた。伝統を活かしてグラフィカルな宇宙風景と空気感を墨で創り上げる。こんなシンプルな描写も、宇宙の緊張感を思いがけず浮かび上がらせるのである。藤崎いづみ作品⑨『月』は「月は宙に軽やかに浮かぶ」という想いを筆にこめた作品である。宇宙空間の天体の動きでの月の満ち欠けは巧緻である。

その漆黒の拡がりでの月のエレメントの象形文字化によって、柔らかな雲がかかる月の鋭い印象を浮かび上がらせた。筆者は書画で文字を象形化と幾何学化することにより宇宙を発信し、墨色で月と雲の色彩を和紙に表現することにより宇宙を感じさせたいと、筆に想いを寄せた。

藤崎いづみ作品⑨『月』書 35.5cm × 57.0cm

藤崎いづみ作品⑩『天海』書
35.5cm × 57.0cm

左右の藤崎いづみ作品⑩『天海』、と、⑪『月船』は4.制作においての文学作品からのイマジネーションで、事例④の『万葉集』の和歌の詞の宇宙心象のタイポグラフィーである。

天海、月船を筆者は書画に仕立てた。

藤崎いづみ作品⑪『月船』書
35.5cm × 57.0cm

『天海』は「靄がかかり天と海の境がない」というイメージを、『月船』は「月はリズミカルで強弱がある」という思いを筆に込めた。

宇宙の風景画を描く、ということから連想するのは宇宙のリズムである。宇宙の現象は連続して拡がり、密度が深く美しい多様性のある波や事象をつくる。天と海は地球のリズムをつくっているように思える。艶墨[9]をつかい付け立て技法[10]を意識した、天海。細やかな宇宙の波形に流れる月船は、意匠的な筆法で絵づくりした。

藤崎いづみ作品⑫『無』書 35.5cm × 57.0cm

藤崎いづみ作品⑬『空』書 35.5cm × 57.0cm

藤崎いづみ作品⑫『無』と、藤崎いづみ作品⑬『空』で配慮したのは「余白」の表現である。日本画は画家にとり余白が宇宙であるし、余白が無であり、宇宙である。空は広義な美である、という意をこめた。和紙空間と文字の大きさのデザインの印象、構成と墨の

配色により緊迫感が見極められる様に、墨の濃淡の強さで、筆を傾けて描くこと、筆の穂先を軽妙につかうことなど、筆のこだわりを織り交ぜて素直に拡がりを描いた。

黒い墨線と和紙の空間、宇宙を書き上げるグラフィズムが濃縮された日本の美である。

7. 結語

本稿では、「自然の宇宙的表現」をめぐる筆者の試みについて考察してきた。筆者は宇宙について考え、宇宙を日本画で表現研究し、実に宇宙を身近に想う。そして、宇宙的視点を追求していく中で、書画の世界観に観られるように、こんなにもシンプルな表現にたどり着いたのである。ゆえに宇宙は実にシンプルであろう。

筆者は大学教育の折り返し地点にいる。ゴールまで、テクノロジーは確実に進化する。人工知能の在り方が問われるが、筆者はそんな未来では、より「手で仕事をする」文化への原点回帰もありえ、未来は人間らしい方向に向かうと考えている。その上での表現研究と教育を展開していくとしよう。

筆者としては、それは、宇宙に包まれた自然を感じ、天球に輝く星のような形態の桜の花や日本の大地に芽吹く植物や自然物、自然環境、自然現象へ感謝し、追いかけることである。自然が自然と続くことは、強く美しい宇宙の様子が現れたものであり、宇宙のようにバランスの美しい世界は存在し続けるし、ずっと続くし、必要とされる。

そして、日本の美が凝縮した世界と、しなやかな永久的な日本の美意識を見つめていく。

宇宙を描き、分かった事がある。岩絵の具の素材が雅やかで優艶であること、天然石が綺麗であり、膠と胡粉、墨の優婉なさま、宇宙と月をデッサンすると、主題の着眼点が風雅に大きくなること。

そして、いつの時も、その時代の美意識は隆盛し、その美意識がトレンドだったこと。そして、いつの時も隆盛を創りだすのは、まぎれもない宇宙の巡り合わせであり、その美を筆者はじめアーティストは描きとめたいと思う。美の主題は、さがし求めていくのではなく、いつの間にか見つかるだろう。

桜花爛漫が待ち遠しい頃に、本稿は冊子刊行し発表される。この先も表現研究を文字に書くこと、絵に描くこと、の重要さに気がつく時節を毎年、桜とともに迎えたい。

藤崎いづみ作品⑭「桜」書 35.5cm × 57.0cm

8. 謝辞

本稿の執筆にあたり、ご指導頂いた武蔵野美術大学小石新八先生、桜美林大学片山博文先生にお礼申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

・海部宣男（1999）『宇宙をうたう』中央公論新社
・片山博文／藤崎いづみ（2017）「コラボレーション・アクティブラーニング― リベラルアーツ教育と造形デザイン教育による共同プロジェクトの教育事例―」桜美林大学『OBIRIN TODAY』第17号、pp.58
・東京藝術大学大学院文化財保存学日本画研究室〔編〕（2007）『図解日本画用語辞典』（株）東京美術
・原研哉（2013）『デザインのデザイン DESIGN OF DESIGN』（株）岩波書店
・藤崎いづみ（2013）「日本画制作における『桜』の表現の考察―自作の原点を探る試み―」桜美林論考『人文研究』第4号、pp.130-138
・藤崎いづみ（2015）「日本画制作における『自然・自然現象』の表現の考察―自作の原点を探る試みⅡ―」 桜美林論考『人文研究』第6号、pp.123-124
・諏訪地方観光連盟（2016）PV 諏訪の国 YouTube〈https://www.youtube.com/watch?v=qqBvYWvktqU〉

美術展カタログ他

・『安田靫彦展』東京国立近代美術館 / 朝日新聞社（2016）
・『平山郁夫　祈りの旅路』 読売新聞東京本社（2007）
・『太陽系ビジュアルブック改訂版』（株）アストロアーツ（2007）
・『玄奘三蔵と薬師寺』 法相宗大本山薬師寺 /（株）飛鳥園 （2015）
・『薬師寺 玄奘三蔵院』法相宗大本山薬師寺 /（株）講談社

作品リスト

・藤崎いづみ作品①『花Ⅰ』紙本彩色 91.0cm × 60.6cm 2016 年制作
・藤崎いづみ作品②『花Ⅱ』紙本彩色 22.0cm × 27.3cm 2007 年制作
・藤崎いづみ作品③『花Ⅲ』紙本彩色 22.0cm × 27.3cm 2007 年制作
・藤崎いづみ作品④『向日葵』紙本彩色 17.9cm × 13.9cm 2007 年制作
・藤崎いづみ作品⑤『Exotic Ⅱ』紙本彩色 53.0cm × 33.3cm 2015 年制作
・藤崎いづみ作品⑥『四季の彩り』紙本彩色 90cm × 220cm 1995 年制作
・藤崎いづみ作品⑦『宇宙の花』紙本彩色 91.0cm × 60.6cm 2017 年制作
・藤崎いづみ作品⑧『諏訪湖水墨画』墨絵 24.3cm × 33.4cm 2017 年制作
・藤崎いづみ作品⑨『月』書 35.5cm × 57.0cm 2016 年制作
・藤崎いづみ作品⑩『天海』書 35.5cm × 57.0cm 2016 年制作
・藤崎いづみ作品⑪『月船』書 35.5cm × 57.0cm 2016 年制作
・藤崎いづみ作品⑫『無』書 35.5cm × 57.0cm 2016 年制作
・藤崎いづみ作品⑬『空』書 35.5cm × 57.0cm 2016 年制作
・藤崎いづみ作品⑭『桜』書 35.5cm × 57.0cm 2016 年制作

註

1）学生の主体性、能動性を引き出すことをめざす教育実践である。

2）絵の具が濡れているうちに他の絵の具をたらし込み、絵の具の滲み、濃淡で得る技法。

3）現代日本画家の巨匠で平山郁夫、東山魁夷、加山又造、杉山寧、高山辰雄の五人の画家のこと。苗字に山が付いていることから日本画五山と言われた。

4）1930 年～ 2009 年 日本画家、教育者。第 6 代、第 8 代東京美術大学学長。仏教やシルクロードの歴史画で画業を極めた。

5）平山郁夫が 20 世紀最後の日に入魂開眼法要で最後の筆入れをし、絵身舎利として祀られた玄奘三蔵の旅を描いた大壁画である。13 画面で全体は 2m20cm × 49m。

6）1884 年～ 1978 年 日本画家。 生涯かけて歴史画を追求し極めた。

7）1887 年に我が国唯一の国立美術学校として設置された。現在の東京藝術大学。

8）1863 年～ 1913 年　東京美術学校創設者。日本の芸術教育の基礎を築いた人物。

9）墨に膠を加えて深みのある墨色を創り出すこと。

10）筆のふくらみや勢いをつかい、墨の濃淡で表現する技法。